九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

長崎街道沿いの烽火

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/17953

出版情報：長崎街道 : 長崎県歴史の道(長崎街道)調査事業報告書, pp.189-194, 2000-03-31. 長崎県教育委員会
バージョン：
権利関係：

第四章（特論）長崎街道沿いの烽火

一　道は軍事道路

多くの旅人がいき通う道は、今昔を問わず軍事道路でもあった。古代には主要道には関が設けられ、国家の変事には固関が行われた。中世には関の他に街道沿いに多くの城が設けられ、中には街道をはさんで土塁（土手、塀）、柵を築くものもあった。そして街道に沿っては狼煙が設置された。

近世の長崎街道も同じだった。外国の来航を厳しく制限していた江戸幕府だったが、通商を行ったオランダ、清との窓口は長崎であった。アジア、ヨーロッパにつながる長崎。外国との緊張は常に長崎に始まった。

イギリス軍艦の長崎入港、すなわちフェートン号事件は偶発的に起こったのではなく、必然的に長崎で起こった事件である。ロシヤ・ラクスマンも長崎入港を目指した。また天草・島原の乱にも、キリシタン一揆はまず長崎を目指し、幕府方は日見峠でこれを迎え討とうとした。長崎侵攻は失敗して原の城の籠城になっていく。

長崎街道は軍事街道としての側面をつねに担っていた。それをもっとも具体的に示しているのが、街道沿いに設置された烽火台である。長崎周辺の烽火の設置は、寛永十五年（一六三八）つまり島原の乱鎮圧後に、松平伊豆守信綱の指示に始まったとされている。正保四年（一六四七）のポルトガル船入港時に使用されたが、寛文四年（一六六四）には一旦停止になった。キリシタン親族の追放を決め、密貿易を厳禁・取り締まるなど、外国との緊張が懸念された享保四年（一七一九）には烽火の整備が検討され、実際同九年に演習として烽火が揚げられた。明和元年（一七六四）には長崎烽火山の中腹にあった遠見番所の機能縮小が行われたが、以後も烽火体制そのものは維持された。[1] しかし莫大な軍事費を必要とする烽火は、平和時には弛緩しがちだ。文化五年（一八〇八）のフェートン号事件時には機能せず、それを機会に再整備された。現在長崎の烽火山（斧山）や長与町琴ノ尾岳にりっぱな烽火台の遺構が残っているが、これはそのおりに再整備された時のものであろう。ただしこれを受け継ぐ福岡藩の烽火体制は六年間常設されたのみで、文化十三年には廃止された。この間に『烽山日記』を記した亀井昭陽らの福岡藩士が烽火番として勤務した。

二　烽火の実用性

十数年も前になるが、わたしは長崎烽火山と長与町琴ノ尾岳の二つの烽火台遺構を見る機会があり、以来狼煙に関心を持ってきた。いくつかの遺構を見学し、それを文章にしたこともある。[2] とかくその実用性については疑問視されがちな狼煙であるが、実際には軍事目的以外にも、また民間でも、例えば米相場師間の連絡や、捕鯨など大至急の連絡を必要とする世界では、恒常的に実用化されていた。捕鯨の拠点の一つ、佐賀県呼子町の加部島に行ったときは、鯨の発見時に苫旗との併用で煙が「すぼ」された話を聞くことができた。

「すぼすとをノロシといいよったです」「生松ば、すぼしよらしたったたい」。

加部島や本部のある小川島、また唐津市屋形石神崎、また加唐島、烏帽子島などに鯨監視所である山見が置かれ、そこから相互にノロシが揚がって、鯨の位置を小川島の本部や捕鯨船に知らせた。そしてそれは電信電話（無線）の普及直前まで、昭和の二二、二三年までは続けられていた（話者は岡部兼雄氏［大正一〇年生まれ］、松口いそさん［明治四四年生まれ］、松口信弘氏［昭和八年生まれ］）。

こんにち『肥前国産物図考』に代表される捕鯨絵巻がいくつか残されているが、小川島鯨山見を描いた場面では、二本の苫旗の横に焚き火が描かれ、「勢美鯨ノ時、篝火ヲ焼」と記してある。狼煙信号はある意味を伝える信号だった。

三　長崎街道沿いの烽火——その一　佐留志の筒男山烽火台

長崎街道に沿った烽火については、戦前からの久保山善映氏や松尾禎作氏以来の研究史がある。[3] わたしも烽火の遺構を調べたことがある。佐賀県杵島郡江北町のJR肥前山口駅北側の山の狼煙台については、近世史料には多く「筒名山」として、また「御嶽山」とみえている。今日、佐留志村の「筒雄」神社の裏手の山に「御用場」の字名がある。見晴らしのよい岩があり、そこでノロシを揚げたと古老はいう。

御岳山の山頂はその背後にあり、標高二四三メートル。一方御用場自体は七六メートルである。

「御岳山でのろしあげたと聞いとるばってん、前のことでナタ、揚げたとこはみたこともなか。カマもみたことはなか。火を焚いたカマは周囲の人が果樹園にするとき、開墾したんじゃろか。（中腹の）御用場にはふとか岩のあるものナタ。直径三、四メートル。六畳シキに入るくらいの岩。表面に出ておるもんナタ。周囲では一番高うして見晴らしは効く。竜王ぐらいまではなんの障害もなか。長崎線が（その奥に）湾のごと見通せる。その御用場のとこで揚げたとは聞いとった。夜は篝をつけた。」（佐留志、土井直氏・大正十四年生）

ところが隣接する惣領分村で聞き取りをしたら、狼煙を揚げた場所を古老がわざわざ案内をしてくれた。そこはホリキリ峠に隣接し通称横山なん越という平坦地で、御用場よりは東方で、またいくぶん低い場所だった（標高五〇メートル、惣領分、坂井琢男氏・大正十年生まれ）。その場所でも顕著な目に見える遺構はみつけられなかった。「佐賀城も見える、小城城も見える。のろしかなんか揚げよったよ。」

たしかにここも樹木さえなければ佐賀方面にも、多良岳方面にも見晴らしの良い場所とは思われた。二本、三本の煙を揚げることが要求される場合もある。あるいは複数の狼煙台があったのかも知れない。

当日の天気については記憶がない。しかし当時のわたしはまだ多良岳や風早の烽火台の位置を確認していなかったので、相互の見通しも厳密には検討できなかった。いまJR列車の車窓から見ると、肥前山口駅あたりから風早高原まではある程度晴れていれば、十分、見通しが利く。

＊　なお筒男山からの火受場所である佐賀県神埼郡岩田の日の隈山には「ジャーバ」（台場）の地名がある。

四　長崎街道沿いの烽火――その二　多良岳烽火山

さて平成十一年（一九九九）十一月五日、長崎街道調査の一環として文化課山口保彦氏、長崎街道ネットワーク黒岩竹二氏、調査員米満誠司氏とともに多良岳烽火山、風配（風早）烽火山の調査を実施した。前者については高来町文化協会田中長氏、吉岡典明氏のご同行もえた。

多良岳烽火山については近世佐賀藩の史料上は

「多良岳尾はへ小峰」（尾はへは「尾栄」とも書かれる）[4]

「高木郡小峯」[5]

として登場する。この「尾はへ」（尾はえ）については当初、地名だろうかと考えていたが、山麓を意味する「うーばえ」（尾ばえ）の意味であると分かった。烽火山は小峰名の範囲に含まれる。小峰は直接は村の名前であるが、その村の山を小峰といったのかも知れない。山の名前の可能性もある。

多良岳烽火山は標高五五四メートルの山である。最初に烽火山展望台にあがった。その日は雲仙平成新山の頂こそみえるが、中腹は霧って見えないような天気だった。晴れてはいるが、百点満点というほどには視界は良好ではない。それでも諫早湾も大村湾も橘湾もみな見えた。そしてまず長崎三山が確認できた。中央の主峰が烽火山（四二六メートル）のはずである。有喜の町は見えないがその北方の山（蓮華石岳など）は眼前にあり、奥に橘湾が見えた。有喜背後の山（「普賢岳」）には、烽が置かれたともいう。大村湾の手前右に風観岳と重なり合うように日の岳（二五八メートル）も見えた。日の岳も古代に烽火が置かれたといわれている。その奥に琴の尾岳（四五四メートル）らしき山影が見えたが、霧に霞んでいた。そして諫早の市街地の後方に煙突からの煙が見えた。地図で測ってみたが、そこまで一三～一四キロはあるとのことだった。霞ん

多良岳烽火山
山頂（554m）より下った462m峰に烽火台があった

だ長崎烽火山を見たときは、夜の火なら通信可能だろうかと思った。しかし意外に煙りもよく判別できた。煙の威力はなかなかのものと、一同が感心した。

しかし烽火台そのものはそれよりかなり下ったところにあった。林道の終点より若干戻った平坦地（標高四六二メートル）がその場所である。五万分の一地図にもその小さな頂を明確に読みとることができる。現在高来町教育委員会によって説明板が設置されているが、登山道もない藪の中なので、訪れる人はよほどの篤志家であろう。発見者の田中長氏の話では「昔からそこにあるといわれてはいた。植林作業をしているとき、石がたくさんあるところがあると、いわれてやってきて確認した。岩崎源治というおじいさんが案内してくれた。植林の時、林道ができて、帰りの空のトラックが石を持ちだしたらしい。実測はしたが基礎部は内径五×五・五メートルの円形だった」とのこと。

たしかにこの山では見かけない石がゴロゴロしている。しかし藪になっているので明確な円形は確認しづらい。全体に長崎烽火山や琴ノ尾烽火台の遺構に較べると、佐賀藩領や福岡藩領内の遺構は保存状況が悪いように思われる。烽火台といっても絵画史料に画かれたものをみると、篝火台式の鉄の台だったり、跳ね釣瓶方式だったりで、移動可能な仮設方式のものが多かった。もしかすれば本格的な構築物ではなく、仮設的な台で、烽を揚げる演習をしたところもあったのだろう。幕府直轄の烽火台は確かに堅固に作られ管理もされていたが、諸藩のものはいくぶん略式だったのかもしれない。

伐開のある林道からは山茶花（茶山花）高原の発電用風車もよく見えた。現在は林になっているが、双方に視界のよく効く場所だっただろう。

なお長崎烽火山と多良岳烽火山の間の距離は二八キロほど。これは松前藩の津軽海峡をはさんだ龍飛岬・白神岬間のノロシの二〇キロよりも長い。毛利・萩藩では油宇村ほうき崎から笹島を経て沖家室に受け継ぐことになっていたが、宝暦頃の財政改革で、笹島の狼煙場を廃止した。そのため油宇村では「狼煙分り兼候故、度々飛船ヲ差立候得共、間ニ合兼候」と、その復活を陳情した（『防長風土注進案』）。油宇―沖家室間は一〇キロほどである。二八キロという距離では遠眼鏡を使用しても、見通せない日がかなりあった。夜の火はまだしも昼の煙は識別できない日もあったかもしれない。

五　長崎街道沿いの烽火――その三　風早

次に風早に回った。史料上は

高木郡風早[6]

とあるが、久保山氏の論考では

藤津郡多良村、長崎街道粒露坂上方の烽火山

『諫早市史』に

藤津郡多良村風配粒露峠直上

とあるものである。高木郡（高来郡）なら長崎県内であるが、どうやら県境を越えた佐賀県藤津郡太良町に烽火山はあるようだった。小長井町古賀木場鳥越の中島忠氏、太良町船倉の大岡峯広氏夫人、同広谷の宮崎栄義氏から聞き取りを行った。まず多良岳烽火山からの観察によって、烽火山であろうと推定した山（標高五一八メートル）の名前を確認したが、その山がまさしくカザハヤであるとのことだった。また粒露坂については今日小字風早となっているところを、以前は「ツブロゴー」といったとのこと、字は分からないが、「粒呂川」だろうとのことだった。現在の太良町小字図にはないが、角川日本地名大辞典・佐賀県・巻末小字一覧には「粒ロ川」（ツナロゴウとなっているが、誤植であろう）として見えている。ツブロ川はツブロを流れている川を指そう。ツブロ坂はそこにいたる坂であろうから、現在の風早に登る北の坂ということになる。近世史料に出てくる烽火山「風早」も、久保論文・『諫早市史』の山も、この山であることはまちがいなかった。『太良町誌』には一辺二五メートル四方の石積みがみられるとある。しかし秋の陽は釣瓶落ち。もはや上がって調査する時間はなかったが、宮崎氏によれば、頂上には何もないとのことである。

＊　水茶屋に登る小長井町側の坂は「長坂」と呼ぶそうである。

風早の烽火台は多良岳烽火台を火受けした。その間の距離はわずか六キロ弱に過ぎない。またここからは佐留志に伝達した。その間二八キロメートル。この距離は長崎―多良岳間と同等である。おそらくは海上を直接佐賀城内にも伝える任務も帯

びていただろう。その距離は三八キロになる。陸路の方は補助としての中継点があったことも考えられる。

多良岳、風早間は見通しの障害を避けるため、短距離に二カ所、烽火台を設定しなければならなかった。多良岳烽火山小峯から佐賀城までは、風配を経由することなく、有明海上を直接に見通せたのだろうか。佐賀城内にも遠見があった。また多良岳と背振山系雷山までを直接に結ぶ計画さえあったのである。

六　烽のルートと長崎街道、そして長崎

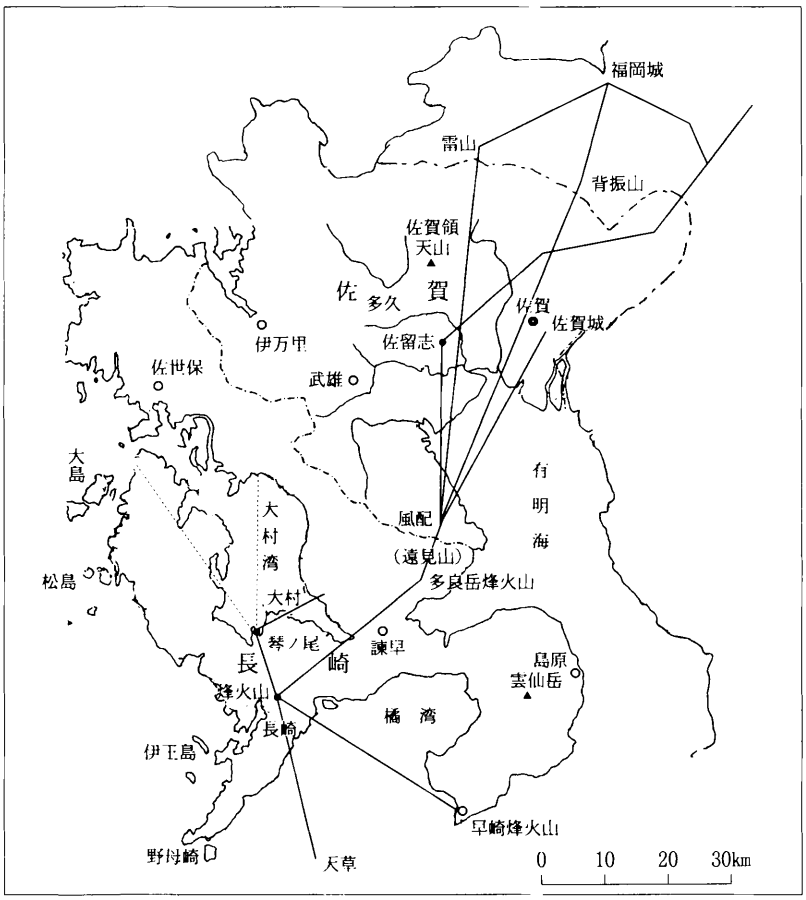
さて以上の三カ所を長崎街道沿いの烽火台としてきたが、異論が出されるかも知れない。この道は長崎街道の本街道ではなく、脇街道ではないか。確かにその通りで、この道は浜海道、諫早海道、太良海道ともいわれた脇往還である。

しかし長崎警備を担当した佐賀藩は大村領を通らずにすむ、この自領内の道ばかりを往来した。烽火をこの道に沿って設定したことの意味も一つはそこにある。だが実際に長崎と佐賀間に直線を引いてみれば、このルートが直線に一番近いのである。軍事的にはこの道が幹線としての意味を持った。

しかし烽の道は単線ではなかったのではないか。まずは琴の尾岳の烽火台の意義を考えたい。この烽火台は管見の限りでは長崎斧山烽火山に同等のりっぱなものである。しかしどう見ても長崎佐賀間の幹線には位置しない。これは大村、玖島城への伝達を主たる任務としたと考えられるが、もう一つには、多良岳への通信が不調な場合のサブルートとして設定されていたのであろう。このサブルートは迂回しての多良岳への通信も可能だったが、むしろ大村藩による陸路交通による伝達を考えていたのであろう。この場合は東彼杵経由になる長崎街道本街道のルートに沿って機能したものと考えられる。ここには大村藩が設定した烽火が大村湾の東岸に沿ってあった(『大村郷村記』)。琴ノ尾烽火台は長崎烽火山の火を直接見ることのできない地域への補完機能も果たしていた。平戸藩や、松島、江ノ島を経由しての五島福江藩(中通島)との連絡をも任務としていた可能性がある。

長崎県内に烽火山と呼ばれる山はほかにもある。口之津の港の南西、早崎の烽火山(標高一〇〇メートル)もそのひとつである。長崎烽火山からの距離は約三〇キロで、長崎―多良岳間と同距離で直接の火受けが可能だった。また天草の苓北町、富岡の尾越にも烽火台の遺構がある。数年前に見学したことがあるが、くぼめた地形にわずかに低い土手と石積みが残っていた。この狼煙は長崎までの距離は三〇キロ弱である。天草西部海岸を南に牛深の魚貫崎にまで伝達することになっていたが、主たる任務は海岸部における変事を長崎に伝達することにあっただろう。

長崎烽火山の情報は四方に発信され、また四方の情報は長崎に集中された。幹線は多良岳を経由するルートだったが、不調時を予想し、複線路線が想定されていたように考えられる。



なお長崎烽火山と多良岳烽火山との距離は長い。近世には烽火山の備品には遠眼鏡も備えられていた。肉眼ではムリでも、実際はかなりの距離の遠視が効いた。有明海上を多良岳と佐賀城を直接に、またさらに六〇キロもある多良岳と筑前国境の雷山までを見通そうという計画は、この優秀な性能を持つ軍事品としての遠眼鏡の使用なくしては、全く考えられないことだろう。しかし遠眼鏡などのない古代ではそうはいかなかった。日の岳のような中継点は多い方が、万全だった。

長崎県内では近世の烽火山のうち幕府が関与したものは、主要には五ヶ所と考えられる（野母崎、斧山、琴の尾、早崎、多良岳）。そして佐賀県になるが、藤津郡との郡境（県境わずかに佐賀県より）に一ヶ所があった。野母崎から肥前国府、そして大宰府への通信を主要任務とした古代の烽もルートは似通っていた。『肥前風土記』は高来郡に烽五ヶ所、そして彼杵郡に三カ所、藤津郡に一ヶ所と記している。多くのものが重なっていただろうが、数は古代律令国家の方が多く、烽のあいだの距離は短かったと考えられる。

註

（1）長崎御番に掛り候書類（鍋島文書・二五二―九五）、以下鍋島文書については小宮睦之氏の御教示をえた。記して感謝したい。

（2）服部英雄「飛脚簫によせて」（『景観にさぐる中世』一九九五・新人物往来社刊、四部二章）

服部英雄「中世・近世に使われたノロシ」（『烽［とぶひ］の道』［青木書店］一九九七年、一八三～二一四頁）

（3）紅露生「非常時警報機関としての幕末北九州烽火台――朝日山放火掛合文書の研究――」（『肥前史談』一〇巻一、二、一九三七）、

久保山善映「九州における上代国防施設と烽火の遺蹟」（『肥前史談』一三―六、一九三九）、

松尾禎作「山烽について――黒船来襲？　のレーダー的役割」（鳥栖市『郷土資料』一九五六）など。

紅露生氏は松尾氏のペンネームという（久保山論文）。

山部淳「佐賀藩の烽について（序論）」（『長崎県地方史だより』平三［一九九一］）

「烽」『諫早市史』（1）（昭三〇［一九五五］）

「烽・太良町のあゆみの記録」（昭五〇［一九七五］）

「烽・風配の烽火台」（『太良町誌』平七［一九九五］）

「小峰　烽火山」（『高来町郷土誌』昭六二［一九八七］）

「小峰烽火山探訪記」（『諫早史談』二九、平元［一九八九］）

田中長「小峰烽火山について」（私家版・平二［一九九〇］）

「狼煙」（『多良見町郷土誌』昭四六［一九七一］）

『琴ノ尾岳公園造成にともなう琴ノ尾烽火台跡緊急整備発掘調査報告書』（長崎県多良見町教育委員会・一九八九）

小峰、風配の烽火関係の文献については田中長氏の御教示をえた。記して感謝したい。

（4）～（6）鍋島文書・日記・文化五年辰十月八日条、十日条、十一日条、十二日条

鍋島文書「吉茂公御年譜」五・享保四年二月